

第六課

なおのこと

神の無限の父としての心

「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さないことがありますよう。」

(マタイ七・九—一二)

主は、先に述べた祈りの答の確実性について、更に確証を与えようとされて、教えを進めてくださいます。すべての疑いを取り除き、御自身の約束がどれほど確かな土台の上に置かれているかを教えるために、だれもがこの地上で見えるもの、また経験するもので訴えられました。私たちは皆子供として、父親に期待した経験を持っています。また私たちは父親として、あるいは父親を見て、どこでも、父親が子供の言うことを聞くことが極めて自然だということを知っています。

す。主はここで世の親たちを見るようにと言われます。この世の最も良い親たちでさえ悪い者であると言われます。とすれば、なおのこと、天の御父は求める者に良いものをくださるということを考えなければいけません。神は罪深い人間よりはるかに勝っております。だから、世の父親が子の願いを聞くとすれば、神はなおさらのこと聞いてくださいます。イエスは、私たちがこのことを強く確信するように望んでおられるのです。神は人間よりはるかに偉大な方であられます。だから、子の願いが父親に聞かれるよりも、はるかに確実に、私たちの祈りは天の父に聞かれるのです。

このたとえば、単純でしかも分りやすいが、そこに含まれている教えは真に深く、霊的です。主は、子の祈りに効果があるかないかは、その子の父親との関係に全く依存しているということをお教えようとしておられます。祈りがその影響力を発揮することができるのは、御父の家において、その愛において、その奉仕において、御父との関係をもつて実際に生きている時のみです。「求めなさい。そうすれば与えられます」という約束の効力は、子としての私たちと、天の御父との愛の関係にかかっています。その関係の中に生き、歩む時に、信仰の祈りとその答は自然に生れます。そこで、私たちのきょうの祈りの学校での学びは次のようになります。すなわち、神の子供として生きなさい。そうすれば、子として祈ることができるようになり、確実に聞いていただけるようになるのです。

では、子としての本当の生き方とは何でしょうか。その答は、どここの家庭でも見出すことができるものです。自分から父親の家を捨て、父親がいることやその愛に喜びを見出すことができず、従順に仕えることをきらいながら、どうして自分のほしい物を求め、またそれを手に入れることができるでしょう。反対に、父親と交わり、その意志、その名誉、その愛を自分の生涯の喜びとしている子供は、自分の求めを聞くことが父の喜びであることを見出すでしょう。聖書は、「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」と言っています。あらゆることを求めることのできる子としての特権は、御霊に導かれて生きることと切り離すことができないものです。御霊に導かれる生活を送るために自らをゆだねる人は、祈りにおいても御霊に導かれます。その人は、御父が与えることが、子として生きることへの神の答であることを知るでしょう。

子供のように生きることがどのようなものであり、また、子供のように信ずることを基盤とする生活がどのようなものであるかを知るには、ただ主が山上の説教で、御父と子らについて教えられたことに注目するよりほかにありません。そこでは、祈りの約束は、その生き方と深くかわっています。この両者は分けることができないものです。両者がいっしょになって一つの完全なものとなります。約束を信じ、主がそれについて教えられたすべてを受け入れる者のみが、その成就を期待できます。「求めなさい。そうすれば与えられます」と言われた時、主は次のように言われたのではないでしょうか。「私が至福の教えの中で言った、子供のように貧しくきよい

者、『神の子どもと呼ばれる』と言った者たちにのみ、私はこの約束を与えます」(マタイ五・三一九)と。あるいは、「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」と言われた子たち。愛のうちを歩みなさい、「そうすれば、神の子と呼ばれる」と言われた者たち(五・四五)。「天の父が完全なように」完全を求めている者たち。人の前ではなく、「隠れた所で見ておられる父」の前で断食し、祈り、施しをする者たち(六・一―一八)。「父が赦すように」赦す者たち(六・一四)。この世のあらゆる必要を、御父にお任せし、神の国と神の義を求める者たち(六・二六―三四)。主よ、主よと言うだけでなく、主のみこころを行う者たち(七・二一)。このような者が、御父の子供であり、御父の愛と奉仕に生きる生き方をする者です。このような、子としての生活のうちにのみ、祈りには確実に、豊かに答が与えられるのです。

しかし、このような教えは、信仰の弱い者を落胆させるのではないのでしょうか。ここに表現されたような子とならなければならないとしたら、多くの者が、祈りの答えられる望みを放棄してしまうのではないのでしょうか。この困難は、父と子という幸いな名についても一度考えるなら取り除かれます。子供は弱いものです。年齢や才能にも大きな差があります。主は、私たちに律法を完全に守るようには言っておられません。子供のように心からゆだねて、御父の子として、従順に真実に生きることが求めておられるにすぎないのです。主はそれ以上のことを要求さ

れないし、それ以下のことを要求されているのでもありません。御父は、心のすべてを要求されています。心のすべてがささげられ、すべてのことにおいて子供のようになり、子供として生きようとする誠実な意志があることが確かめられる時、私たちの祈りは、子としての祈りと見なされるのです。山上の説教を素直に読み、それを人生の指針とするならば、弱さや失敗があったとしても、祈りに関する約束の成就を要求する自由が、いつも増大していくことを見出すことができますでしょう。父と子という名の中に、願いが聞かれる特権があるのです。

これは、イエスが特にここで強調されている点で、主は主の弟子たちのすべてがそれを会得するよう望んでおられるのです。主は、私たちの心を神の父としての愛で満たすことが効果的な祈りの秘訣であることを分らせたいと望んでおられます。神が父であることを知るだけでは不十分です。主は、私たちが時間をかけて、父という名の持つ意味を完全に知るようになることを望んでおられます。

私たちは、この世の最良の父親のことを考えてみなければなりません。優しい愛をもって自分の子供の要求を顧み、愛と喜びのうちにすべての正当な願いを聞き入れることなどを考えるべきです。次に、神をあがめる心をもって神の無限の愛と父としての心を考え、主が、更に大きな優しさと喜びをもって、みもとに来る私たちをご覧になっておられることを考え、正しい求めに与えずにおられないことを考えなければなりません。この神の計算が私たちの理解を越えることが

分り、神がいつでも私たちに耳を傾けてくださることがとても理解できないと感ずる時、御霊が神の父としての愛を私たちに注いでくださるよう、みもとに行つて求めることを望まれます。祈る時にだけそれを求めるのではなく、心も生涯もささげて、その愛のうちにとどまることを求めようではありませんか。何かを求める時にだけ父の愛を知ろうとするなら、その子供は失望するでしょう。しかし、いついかなる時もすべてのことにおいて神を父と認め、その御臨在と愛の中で全生涯をすごそうとする者、また、神の大きな愛を受け入れ、神を父として迎える者は、神の無限の父としての心と、絶えず祈りが答えられることが切り離せないものであることを、見事に経験することでしょう。

愛する仲間の弟子である皆さん、私たちは、祈りが日々答えられるということをよく知らない理由が何であるか、また主がその学校で教えてくださる主要な学課が何であるかが分りかけてきました。それはすべて、父という御名の中にあります。私たちは、キリストの学校で身につけるものとして、祈りの世界の奥義のいくつかについて、新しく深い洞察を与えられました。主が最初に教えられたものが最高の学課でした。私たちは、「アバ父よ」「天にいます私たちの父よ」と正しく言えるようにならなければなりません。このように言える者は、すべての祈りのかぎを持つているのです。病弱な子供の言うことを聞く父親の愛情、まだ舌のよく回らない子供の言うことを聞く父親の喜び、あさはかな考えの子供に示す父親の忍耐を鏡として、御父の心を学ばな

とを聞く父親の喜び、あさはかな者の喜び、
ればなりません。そうすれば、すべての祈りは、「なおのこと、天におられるあなたがたの父が、
どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう」という神のみことばの信
仰に立って、上へのぼって行くようになるでしょう。

恵み深い主よ。これは、あなたの学校における、最初の、最も簡単な、栄光に満ちた学課で
す。しかし、それが私たちの心にとって最もむずかしい学課の一つであることをあなたは御存知
です。私たちは、あまりにも御父の愛を知りません。主よ、私たちに御父とともに生きることが
教えてください。そして、御父の愛を、この世のいかなる父親の愛より近く、明らかで、また慕
わしいものにしてください。天が地より高いように、神が人間よりも無限に大いなる方であるよ
うに、私たちの祈りが聞かれるという確信が、世の親に対する信頼よりはるかに大きなものとな
りますように。主よ、子供らしくないために神から遠ざかり、祈りを妨げていることを示してく
ださい。そして、私たちに神の子としての本当の生き方をさせてください。主イエスよ、子供の
ような信頼を呼び起すものは、父の愛です。私たちが子供らしくなるために、また子供としての
生活の中に祈りの力がひそんでいることを経験するために、御父の優しくあわれみに富んだ愛を
示してください。

恵み深い神の御子よ。御父はあなたを愛し、すべてのものをあなたにお与えになりました。あなたも御父を愛し、御父が命じられたことをすべて行われました。だから、あなたには、すべてのものを求める力があります。主よ。あなた御自身の霊、すなわち、御子の御霊をお与えください。あなたがこの地上におられた時のように、私たちを子供らしくしてください。天が地よりも高いように、神の父としての愛と、求めるものを与えてくださる神の備えとは、私たちが考え想像する以上のものです。あらゆる祈りがこの信仰の中で息づくものになりますように。アーメン。

注

「天におられるあなたがたの父。」悲しいことに、このことばを私たちが口にするのは、ただ単に敬意を表すためだけです。私たちはこれをこの世の生活習慣の中から借りて来て、ぼんやりとした皮相的な意味で神に適用しています。神を、私たち自身の、優しい、あわれみに富む父として迎えることを恐れているのです。神を教師ないしそれ以下の者のように思っています。更には、私たちのことをあまりよく知らない視学官ぐらいにしか考えません。その目は学生ではなく、本だけに注がれ、すべての者が一定の標準に達することだけを願っているのです、と。

小さな神の子よ。心の耳を開きなさい。このことをたましいの奥底にまで届かせなさい。天の父の愛と忍

だけを願っているのです、と。
 小さな神の子よ。心の耳を開きなさい。このことをたましいの奥底にまで届かせなさい。天の父の愛と忍

耐とあわれみの中にこそ、きよめの出発点があります。私たちは、むずかしい学課を学ぶ時のように、神によく見られようという考えから、きよめを学ぶ必要はありません。私たちを助けてくださる御父とともにいるというアットホームな気持で学べばよいのです。神があなたを愛してくださるのは、あなたが賢いからでも善良だからでもありません。ただ神があなたの父であるからなのです。キリストの十字架が、神に私たちを愛させるようにしたわけではありません。十字架は、私たちに対する神の愛の現れであり、処置なのです。神は最も不器用で、のろまで、悪い子でも愛されます。神の愛はすべてのものの背後にあります。私たちは、自分の信仰の堅い土台をその上に置かなければなりません。信仰が育ってそうなるのではなく、そこから信仰が育っていくのです。私たちはそこから始めなければなりません。さもないければ、始めてもむなしいものに終るだけです。このことをしっかりとつかんでおきなさい。私たちは、自分の望みや力や確信に期待してはいけません。「天におられるあなたがたの父」というところから始める時、なんとという望みが、力が、確信が私たちのものとなることでしょう。

私たちは、「あなたがたの父」ということばにある優しさと力にすぎり、そこに憩う必要があります。このすばらしい真理にいくらかでも触れるようになるまで、何回でもこのことばを繰り返しなさい。それは、私が、神と最も親密な関係に結ばれていることと、他の何ものも与えることができない神の愛と力と祝福にあずかる権利を持っていることを意味しています。私たちは、なんと大胆に神に近づくことができることでしょうか。またなんと大きなことを求める権利を持っていることでしょうか。「あなたがたの父。」それは、神が無限の愛と忍耐と知恵を傾けて助けてくださるということなのです。この関係には、きよめの可能性というだけではなく、無限にそれ以上のものがあるのです。

私たちの父の忍耐強い愛の中から出発しなければなりません。御父は、私たちのくせや弱さや困難につい

てすべて御存知です。教師は結果によって判断をしますが、私たちの父は、私たちの努力で判断をします。失敗は必ずしも過ちを意味しません。他の人は物事を大ききだけで測りますが、御父はそこで費やされる努力や重要性まで調べられます。あなたの父だからです。他の人にとって、つまらなく無意味に思える小さな者のあわれな初歩的な歩みをも、御父はなんと重視してくださることでしょう。すべてはこの恵み深い関係にあります。

(マーク・ガイ・ピアスの『きよめについて』による。きよめの出発点としての、神の父性の知識に関するこの美しい表現は、そのまま祈りにもあてはまる。)